

「14. 資本蓄積の進行と失業」への補足

1. はじめに
 - 1.1 対象
 - 1.2 注記
 - 1.3 留保
2. 本論

1. はじめに

1.1 対象

「14. 資本蓄積の進行と失業」のレジюмеには次のような記述がある。

一般的に言うと、好況期には、急激な生産拡大の結果として、資本構成が高度化する以上に、不変資本の絶対量が増え、したがってまた可変資本の絶対量も増える。だから、好況期には、失業率が減っていき、賃金が上昇する。

[.....]

これにたいして、やはり一般的に言うと、不況期には、不変資本の絶対量が増える以上に、資本構成が高度化する。[.....] こうして資本構成が急速に高度化し、それとともなって失業率が増大するわけである。

ここでは、この記述について、若干補足しておく。

1.2 注記

この補足は「『11. 労働時間の延長』への補足」の理解を前提している(つまり細かい論証を省略している)。この補足を読む前に、「『11. 労働時間の延長』への補足」を読んでおくこと。

なお、この補足の内容を試験に出すことはない。

1.3 留保

本論に入る前に一言。有用物のレベルで考えると、そもそも追加的生産手段(特に機械設備のような追加的労働手段)の変化を連続的とみなすことはできない。たとえば、工作機械を 0.001 台追加するなんてのはナンセンスである。工作機械は 1 台で初めて有用物として(つまり生産手段として)機能する。

それだけではない。生産が最も効率的に行われるためには、各生産要素(生産手段および労働力)は一定の比率で追加されなければならない。工場建物がいっぱいいっぱいなのに工作機械を導入しても全く非効率的だし、工場を増築したら(あるいは新工場を建設したら)、1 台の工作機械ではなく、5 台の工作機械を導入しないと、最も効率的にはならないかもしれない。この場合には、追加的な工作機械は、5 台単位で(5 の倍数で)導入されることになるだろう。

だからこそ、やはり価値のレベルで考えてもまた、追加的資本(特に追加的固定資本)を投下するためには、何回転期間にもわたる蓄積基金の積立が必要になったのであった。

ただし、ここでは、資本構成の変化、追加的資本の形成は蓄積基金が積み立てられている段階ですで行われているとみなすことにする。すなわち、積み立て

られている追加的不変資本価値が、実際に有用物としての生産手段の購買に支出される前に、すでに積み立てられている最中から、これをカウントすることができ、また生産力の発展に応じて資本構成もすでに変化

している とみなすことにする。こういうわけで、ここでは、価値のレベルでは資本構成も不変資本も可変資本も連続的に変化するとみなすことができると想定しておこう。

2. 本論

いま、資本構成を o で表そう。すなわち、

$$o = \frac{C}{v}$$

ここで、 o 、 C 、 v の変化分（時間についての 1 次の導関数）をそれぞれ \dot{o} 、 \dot{C} 、 \dot{v} で表すと、「『11. 労働時間の延長』への補足」と全く同じ手続き¹⁾によって、

$$\frac{\dot{o}}{o} = \frac{\dot{C}}{C} - \frac{\dot{v}}{v} \quad (1)$$

になる。したがって、資本構成が高度化する ($\frac{\dot{o}}{o} > 0$) ための条件は、

$$\left(\frac{\dot{C}}{C} - \frac{\dot{v}}{v} \right) > 0 \quad (2)$$

すなわち、

$$\frac{\dot{C}}{C} > \frac{\dot{v}}{v} \quad (3)$$

である。

1) 「『11. 労働時間の延長』への補足」における剰余価値率の定義式 ($s^* = \frac{s}{v}$) と、ここでの資本構成の定義式 ($o = \frac{C}{v}$) とは、全く同じ構造をしている。したがって、 s^* を o に、 s を C に置き換えて、「『11. 労働時間の延長』への補足」での手続きを追っていけば、ここでの式 (1) を導出することができる。すなわち、「『11. 労働時間の延長』への補足」における式 (5) が、ここでの式 (1) に相当する。

さて、ここで、可変資本が減少するための条件を探るために、式 (1) を変形してみよう。

$$\frac{\dot{v}}{v} = \frac{\dot{C}}{C} - \frac{\dot{o}}{o}$$

したがって、

$$\frac{\dot{C}}{C} - \frac{\dot{o}}{o} < 0 \Rightarrow \frac{\dot{v}}{v} < 0$$

すなわち、

$$\frac{\dot{o}}{o} > \frac{\dot{C}}{C} \Rightarrow \frac{\dot{v}}{v} < 0$$

ここで、 $v > 0$ であり、かつ $\frac{\dot{C}}{C} > 0$ であり、かつ（資本構成が高度化するためには） $\frac{\dot{o}}{o} > 0$ であるから、

$$\frac{\dot{o}}{o} > \frac{\dot{C}}{C} > 0 \Rightarrow \frac{\dot{v}}{v} < 0 \quad (4)$$

になる。すなわち、資本構成の上昇率が不変資本の増加率を上回るならば、可変資本は減少する。

逆は逆である。つまり、

$$\frac{\dot{C}}{C} > \frac{\dot{o}}{o} > 0 \Rightarrow \frac{\dot{v}}{v} > 0 \quad (5)$$

すなわち、不変資本の増加率が資本構成の上昇率を上回るならば、可変資本は増大する。